2023 年度「台湾短期派遣プログラム報告書」

国際食料情報学部・食料環境経済学科・２年・41722190・浦山にこ

１．当初の目的

私は、台湾ならではの食品・農産物と食文化について、生産や製造の過程から学ぶことを目的としてこのプログラムに参加した。

私は以前観光を目的に台湾を何度か訪れたことがあり、そのときに自国では見たこともないような市場の様子や、中国とも異なる独特の食文化を形成している台湾の食事情に大変驚き、この国の食と農についてもっと知りたいと強く思った。しかし、観光ではただ食べるだけで、その食べ物がどのように育てられ、作られているかまでは知ることができない。そのため、実学研修を多く取り入れたこのプログラムに参加することで、台湾の食について、ただ「おいしかった」というだけでなく、生産、栽培、製造等の過程からより深く学びたいと考えた。特に私は日本では栽培も輸入もほとんどされていない台湾の果物や、日本のものとは味付けや風味の大きく異なる加工肉製品の製造と台湾の畜産業に興味があるため、それらについて現地で学ぶことを目的としていた。

また、現地の学生と交流し、台湾の文化に倣って生活することでグローバルな感性を磨き、他国の生活や文化を身をもって体験することで、国際人としての素養を身に着けたいとも考えていた。

２．目的達成のために現地で活動した内容

ここでは、特に印象に残った施設や活動を取り上げることとする。

2－1．中興大学動物科学科での実習・畜舎見学

中興大学動物科学科でのプログラムでは、精肉部では台湾ソーセージと肉団子、乳業部では牛乳を使って作る台湾式のおやつとソフトクリームを作る実習を行った。実際に自分で調理過程を体験し、食べてみたことで様々な発見があった。ソーセージは日本でよく食べられているものに比べてサイズが大きく、調理過程を見ると砂糖と八角等のスパイス系の粉末を大量に入れていた。実際に食べてみると、やはり塩気が効いているのが一般的な日本のソーセージとは対照的に、かなり甘く独特な風味であったが、癖になる味で美味しかった。ほかにも台湾ジャーキーや肉でんぶなども食べる機会があったが、どれも台湾の加工肉は甘いものが多く、それは台湾の高温多湿な気候がサトウキビの生育に適しており収穫量が多いことが理由であるという。日本では保存方法として塩が良く使われているのに対し、台湾では価格が安く大量に消費しやすい砂糖を使っているため、加工肉類の味付けは甘いことが多いのだと知ることができた。

畜舎では様々な動物を飼育しており、学生が手入れをし、心を込めて飼育している動物たちは圧巻だった。鶏や豚などいわゆる家畜の他に、ヤギやウズラなども飼育しており、ヤギミルクの試飲もさせていただいた。初めて食べるものや体験することが

多かったが、台湾独特の食品の製造や畜産の様子を見学できてよかった。

2-2. パッションフルーツ・台湾ナツメ農園見学

高雄にて、パッションフルーツと台湾ナツメの農園を見学した。どちらも上からの吊り下げ農法を採用していた。この農法によって果実に均等に日光を浴びせることができるため、均等な大きさ、形のものが栽培できるのだという。パッションフルーツはとてもサイズが大きく、日本で売っているものよりも数倍大きいように感じた。私の中ではパッションフルーツはただただ酸っぱいようなイメージだったが、別の場所にて実際に食べる機会があり食べてみると、とても甘くおいしかったので驚いた。台湾ナツメは私の知るナツメとは見た目も味も大きく異なり、りんごと梨の中間のような食感の果物だった。日本では売っているのを見たことがないため大変興味深かった。日本にも近々輸出予定とのことだが、今は認知度はほぼないだろうが、みずみずしく程よい甘みでおいしい果物なので、日本でも売れるのではないかと思う。

３．目標達成度の自己評価

目的どおり、学びたいと考えていた台湾の食品・農産物と食文化について、観光で知れること以上に深く学ぶことができたと思う。特に加工肉と果物については生産・栽培・製造の過程から見学することができ、充実した実学研修を行えたと思う。一方で、英語力に関しては足りていないと思うことが多かった。説明していただいている内容について英語が分からないために理解できないような場面も多々あり、自分の英

語力不足を痛感した。渡航までにできる限りの勉強や英語力を高めるための努力をしていればよかったと反省した。また、現地の人や学生とたくさんコミュニケーションを取れたことは良かったと思う。学生たちとたくさん言葉を交わし交流することで、台湾の文化をより詳しく知ることができ、二週間という短い間だが、台湾での生活になじむことができた。帰国した後も連絡を取り合えるような仲になり、自分のネットワークが国を超えて広がったことがとてもうれしかった。上記では反省点として英語力不足を挙げたが、一方で市場や飲食店等で現地の人と交流する中では、「英語ができる」ということだけがコミュニケーションにおいて大切ではないということも学んだ。困ったときにとにかくボディーランゲージ伝えようとし、少しでも中国語を覚え、拙くても積極的使ってみようとしたことで、プログラム外でもたくさんの現地人と会話することができた。何より、必死に伝えようとする私に対して、現地の人々はとても親切にしてくれることが多く、台湾人のやさしさと温かさを感じた。このようなことから、もちろん上手に言葉を話せることも大事だが、とにかく伝えようという気持ちをもって接することが重要だと学ぶことができた。

４．今後の取り組み

今回の研修で学んだ知識をより深めていくため、今後は台湾の食文化についてより関心をもって調べていきたいと思う。今回のプログラムでは生産や栽培などの過程についての学びが多かったため、これを軸に今度はそれらの生産物や食品をどのように輸出しているのかなど、台湾の食品の流通・販売についても学んでみたい。また、英語力に関して反省する点が多かったため、今まで以上に英語の勉強に力を入れたい。特に、スピーキング能力の重要性について実感することが多く、話が聞き取れていてもそれに対する自分の答えを英語でうまく話し返せないことにもどかしさを感じたため、スムーズに自分の気持ちが英語で話せるようにもっと勉強しようと思う。さらに、今後留学生や他国の人と交流できる機会があれば積極的に参加し、英語で話すことに慣れるよう、いろいろな人とコミュニケーションを取ることを心がけたい。